脚本_ソルティドッグプレス

http://unohirotest.mydns.jp/hiroshi/cgi/top.pl

karasuno10

記者

ソルティドッグ・プレス

烏野　博史

人物

大分健治（おおいたけんじ）（28）〃月刊ホビー〃・編集者

石津天音（いしづあまね）（32）大分の担当する漫画家

山倉明彦（やまくらあきひこ）（50）〃月刊ホビー〃・編集長

山崎勉（やまざきつとむ）（40）大分の同僚

吉川卓磨（よしかわたくま）（30）大分の同僚

早乙女富子（さおとめとみこ）（23）大分の同僚

係員（24）

客達

大分健治は犬嫌い。実家では犬を飼っている。少年時代、ボクシングをしていた大分は路上の野犬に喧嘩を売り、噛まれた。

大学卒業後、玩具が好きな大分は、玩具雑誌、月刊ホビーの編集者となる。大分のホビーでの仕事は取材時に集まった玩具を読者にプレゼントするプレゼントコーナーと、ホビーの看板ルポ漫画〝ホット・ドッグ・プレス〟。ホット・ドッグ・プレスでは漫画家、石津天音により玩具や娯楽イベントの紹介がされている。なお、タイトルは天音の犬好きにより名付けられた。大分のホットドッグプレスでの主な仕事は無事に天音の原稿を回収する事。ネタの提供や、スケジュール管理、取材をしたり、取材に同行したりである。

今回、大分と天音は、犬と触れ合う娯楽施設〝ワンワンランド〟のルポ漫画を描く事になり取材を行ったが、消極的な大分の取材内容に納得がいかない天音は再び、取材に行く事を提案する。

①天音の仕事場

大分健治（おおいたけんじ）（28）がドアから入る。フレンチ・ブルドッグの〝サトミ〟が大分に走り寄る。大分、ドアにはりつく。

大分「先生、い、犬がいます！」

石津天音（いしづあまね）（32）が大分からかけ離れるサトミを抱え上げる。

天音「参考に借りたのよ。今回のワンワンランドの取材、犬嫌いのあなたがこれを機に犬好きになるほうが美談だと思わない？」

カゴにしまわれたサトミ。

回転椅子に座り向かい会う大分と天音。

目頭をさわる大分。

大分「あのですね……そもそも、僕が犬嫌いを克服するという内容は枝葉の問題であって、今回の目的は〝ワンワンランド〟の施設や楽しさの紹介ですよね？」

天音「もちろん、その部分はできてるわ」

天音、大分に漫画の下書きの束を渡す。

束の一番上の紙には〝ホット・ドッグ・

プレス　第40話〝と書かれている。
大分、下書きをめくっていく。
12ページ目の下半分に、〝大分の犬嫌い克服〟と書かれている。
大分「最後の半ページ……ここは僕が犬嫌いを克服しました。めでたしめでたしで――」
天音「駄目よ。あなた克服してないじゃない」
天音、そっぽを向く。
大分「嘘を書いても良いんですよ!!　特に僕のことなんか……」
天音「駄目よ。私は嘘をつく時でもリアリティを大切にするの!!　取材時のあなた、お世辞にも克服したとは言えないわ!!」
天音、三枚の写真を机に放り、回転椅子を回転させ、大分に背中を向ける。
切ない笑顔で犬に触れる大分の写真。
大分「……あの僕はどうすれば」
天音「もう一度行くのよワンワンランドへ」
天音の背中。
大分「……わかりました。編集長の許可が下

りたら、取材に同行します。多分無理ですよ。僕のコーナーもありますし」

大分、溜息をつく。

②〝月刊ホビー〟編集部

〝月刊ホビー編集部〟の立て札。

大分と天音が立っている向かい、編集長の席に山倉明彦（50）が座っている。

山倉「良いよぉ。行ってきなさい」

天音、頭を下げる。

天音「ありがとうございます。山倉編集長」

大分「でもですね。僕にも仕事が――」

山倉「君、どうせ仕事してないじゃない」

大分「そんな事は！　心外です！」

山倉「そういわれてもねぇ」

天音「わかるのよ、机を見たらその人が。例えば、何だかアウトローな山崎さん」

天音の指差す方向、釣り道具と酒と煙草のある机で電話する山崎勉（40）。

天音「二次元に嫁がいる吉川君」

美少女フィギュアで彩られた机で、付箋だらけのＰＣに向う吉川卓磨（よしかわたくま）（30）。

天音「乙女のトミちゃん」

プリクラや装飾の施された机で、写真をチェックしている早乙女富子（さおとめとみこ）（23）。

天音「皆多少ゴチャつくけど大分君のは……」

椅子の上まで玩具が山のようにつみあがり、引き出しが開けっ放しの机。

天音と山倉、頷きあう。

天音「ゴミ――」

大分「そんな事ありません！　編集長は僕と天音先生のどちらを信じるんですか!?」

山倉「天音君だよぉ」

大分、口をぽかんと開ける。

③ワンワンランド・前

ワンワンランドの看板。

④同・ドッグレース場

多種の犬達がいっせいにかけだす。

ケージの外側で大分と天音と客達がゼッケンをつけた犬達を応援している。
園内放送用スピーカー。
係員の声「只今のレース、一着セバスチャン、二着――」
ケージの前でノビをする大分と天音。
大分「あぁ、楽しかった！　さて！」
歩き出す大分の肩を掴む天音。
天音「大分君どこ行くの？　そっちは出口よ」
大分「え、だって目的は達成しましたし……」
天音、大分の顎をつかむ。
天音「甘いわ。おて、おすわり、ふせ、を使いこなして、犬との信頼関係を築くのよ」
大分「……はい」
大分、笑顔がひきつる。

⑤同・ふれあい広場
カメラを抱えた天音が、係員にお辞儀をしている。天音の横、息巻く大分がずんずん小型犬のほうに歩いていく。

天音「大分君、大丈夫？」
大分「まかせて下さい」
　大分、ダックスフントを見る。
　大分、膝関節を曲げずにダックスフントに早足で近づく。大分から距離をとるダックスフント。
　大分、がくがくと、顔だけでダックスフントの方に向く。
　速度を上げ追いかける大分から、逃げるダックスフント。
天音「あんたはロボットか」
　天音の周りに群がる犬達と心配そうにしている係員。
　大分から距離をとる犬達。
大分「なぜだ。どうして犬達は僕に寄ってこない。どうして先生にだけ好意的なんだ」
　大分、ダックスフントを見る。ダックスフントにほえられ、たじろぐ大分。
大分「先生はズルいです。僕が知らない間に犬達を手なづけてるんですから」

天音「はぁ？　言っとくけど私は大分君と一緒にしかここには来てないわよ」

大分、眼を見開く。

大分「なぜ……」

天音「追いかけるから逃げるのよ。じっとしてなさい」

息を飲む大分、空を仰いで目をつぶる。

犬達、棒立ちの大分に徐々に近づく。

大分「先生!!　これからどうすれば!?」

天音「ほら、犬が寄ってきてるじゃない。スキンシップよスキンシップ!!」

天音、カメラを構える。

大分、直立したまま犬達を見る。

大分に群がる犬達。

大分「無理です。こいつ等、数が多すぎます！」

天音「しっかりしなさい。実家では犬を飼っていたんでしょ!?」

大分「無理です。よく考えたら、僕、実家の犬に餌をあげた事もなかったんです」

天音、カメラを下ろす。

天音「あら……そう」
　天音、溜息をつく。
天音「仕方ないわね。あきらめましょう」
大分「（涙声で）その失望の眼、やめてください！　傷つきます！」
天音「泣くなよ……」
　着信音、アントニオ猪木のテーマ。
　天音、ポケットから携帯電話を出す。
天音「はい。山倉編集長？　大分君ですか？　もう硬直しちゃって。はいはい。そうなんですよ。代わりますね。大分君」
　天音、大分に携帯を投げ渡す。
大分「はい、大分です」
山倉の声「大分君、君さ、あんまり天音君を困らせるとさ減給だよぉ」
大分「いえ、そんな事はありません。先生も大助かりだと仰ってます」
山倉の声「本当に？　また取材の報告聞かせてねぇ、天音君によろしく」
　電話が切れる音。

大分「はい!!　不肖大分、がんばります！」
　大分、真剣な顔で電話をしまう。
大分「先生!!」
　犬を撫で回している天音、大分を見る。
大分「カメラの準備をお願いします!!　この大分健治が人肌脱ぎます。楽しそうに犬をなで回してご覧にいれますので、撮り損じのないようお願いします」
天音「はぁ」
大分「この小さい犬でいきます！」
　大分、ダックスフントを指さす。
天音「はいはい、ダックスフントね」
　大分、真剣にダックスフントを見る。
　大分を見つめるダックスフント。
　カメラを構える天音。
　額に汗がにじむ大分、両腕を広げる。
　大分、ダックスフントの頭上めがけて一気に手を伸ばす。
天音「馬鹿!!　目線の高さを揃えなさい!!」
　天音、嬉しそうにシャッターを押す。

笑顔で、ダックスフントに手を噛まれている大分の写真。

⑥天音の仕事場

床に正座した大分と回転椅子に座る天音が向き合っている。天音の机には紅茶の入ったカップ。大分は複数の絆創膏をはった手で原稿を持っている。
原稿の内容、12ページ目の下半分にはワンワンランドへのアクセスマップ。

大分「ありがとうございます。あの、僕が犬嫌いを克服するくだりは……」

天音、紅茶を口に運び、微笑む。

天音「やめたわ。克服はしてないし、大分君は犬嫌いのままの方が素敵だわ」

大分、目頭を押さえて、原稿を置き、床に突っ伏す。

天音「もう、そんなに感激しなくて良いのよ」

天音、大分の肩に手を置く。
天音に肩を揺らされるがままの大分。

著者HP：烏野の箱庭